
傍にいただけが愛じゃない。

風巴 峰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍にいただけが愛じゃない。

【Nコード】

N7570X

【作者名】

風巴 峰

【あらすじ】

ふっと、書きなぐって放置してたやつ。

俗にいう平次夢？

平和推奨な方は引き返していただきたいかな？

日常の1コマです。

愛人でも、お2号さんでも、なんでもええんよ。

うちのこと、こつして抱きしめて、名前呼んでくれたら、それで、ええんよ。

自分の大事なモン、守るて決めたモン、頑固に体張って守つとるあんに、惚れたんやから。

せやから、あんたがじぶんで決めたことちゃんとやり通さなあかんよ。

ここから、うちが見とくさかい。

見届けるさかい。

しんどおなつたら寝かしつけたるし、弱気になったら尻叩いて送り出したるから。

あんたの都合のいいように、うちを使つてくれてかまへんよ。

あんたが必要としてくれるんやったら、うちはなんでも、ええんよ。

「で、今回は何時間待ち？」

「ん、10時間くらいなんちゃう？」

久々のデートが待ちぼうけで終わったと知った親友が、こめかみをわずかに動かしながら、今度こそ殴っていい？と聞いてくる。感情豊かな親友はいつだって私より、自分のこと以上に彼の暴挙を怒ってくれるのだ。

「まあ、今回は東京下んだりしとったらしいし、許したって？それに慣れっこやから気にしてないねん」

そう、彼とのデートが成立する確立は驚く程低い。

彼との間で交わされる約束の大半は反故されるためにあり、彼から連絡が来るまでの数時間の時間を一人で過ごすことが常となつて随分と久しい。

彼は高校生でありながら、殺人事件だ何だと血なまぐさい事柄に首をつっこみ、キラキラした表情を晒している。自らを探偵と称する彼は、自他共に認める名探偵であるがために、警察関係者から昼夜時間を問わずに呼び出しが掛かってくるのだ。一度探偵モードに入ると事件以外のことは思考の彼方に追いやられてしまうらしい。

「あんた、もつと怒り。ただでさえ放つとかれて、その上隣にはかわいいかわいい幼馴染み侍らしとる推理オタクやんか。うちが殴つたるか？」

「かめへんで。本人楽しんでるんやし、放つとかれてる訳やない

んよ？」

そういつてケータイを親友に渡す。

「すっぱかされた後はめっちゃメル激しいねん」

彼のメールボックスを開いているだろう親友に伝える。探偵モード以外ではなんだかんと言いつつ結構無精男な彼は、それでも朝晩のメルを欠かさない。それは単に「おはよう」「お休み」それだけのことだが、毎日続けることは以外と難しいのだ。それから、デートをすっぱかされた後は詫びの言葉から始まり、埋め合わせの約束やらなんやらとやり取りが続く。

「メルもええけど、電話せよ」

「メルでええんよ。残るやん？それに言葉打ってる間の時間はうちのもんやろ？」

メールのやり取りを確認し呆れたように呟く親友は、未だに怒った表情をしている。これで十分だとわかってほしいのだが、彼女には理解がたいのだろうか。

実はメール嫌いな彼はあまりメールでのやりとりをしない。言葉を文字で見ってしまうと、どうしても構えてしまい何度も考え直してしまうと言っていた。彼とのメールにタイムラグがあるのはそのせいだ。

ああ思えば朝晩の定期連絡でさえ、同じ内容のものはない。

挨拶とともにある一言を難しい顔をして考えているのだろうか。

かなり笑える話だ。

「あんたがえーならそれでええんよ。何度も言うところけど。許されへんのはあんたっちゅー女がおるのにや！幼なじみやかなんかしらんが他の女侍らしとるあの男や！」

「かめんねや。なにしろうちとの付き合いより長いんやし」

「長かろうが短かろうが、そんなん関係あらへんやろ。あんた、彼女ねんで。自覚薄いんちゃうノン！」

ふと外をみると、彼が幼なじみと仲良くじゃれあっている。そんな光景を見て、羨ましいなと思うけど嫉妬したことは一度もない。

どちらかと言えば微笑ましいと思ってしまう。

これは彼女としてはおかしいのだろうか。

「まあ結局のところ当人同士が納得してるかと、所詮他人のうかが何言ったってしゃあないっちゅうことやな」

仕方なさ気に肩を竦め、親友も外を眺める。

「うちが男なら絶対あんたのこと嫁にするのに」

「うちが男やったらお婿さんにもろてくれる？」

「当然やる？相思相愛っちゅーのんはうちのこのこというんで」
後ろから腰に手を回し抱きついてくる親友に顔をよせる。外では彼と彼の幼なじみが自分達と同じように戯れあっている。

「たまに、淋しいと思うときもあるけど、自分がいつも傍におってくれて、ようさん怒ってくれるから、うち物分かりのええ女でおれるねん。ほんま、ありがとあな」

親友を抱き締めながらの告白は、いつも心の奥で思っている感謝の気持ち。

きっと彼女のおかげで彼を、彼らしく受け入れられているのだろう。そうでなかったらみっともなく彼にいろいろなことを我慢させてしまう。

それは自分の好きになった彼ではない。

彼にはいつだって、キラキラしてほしいから。

キラキラしている彼を好きになったのだから、自分のせいでそれがなくなるのはいやだ。

我慢しているわけではない。

彼に大事にされていると思う。

都合のいい女にされているとは思わない。

親友はときどき片思いみたいな恋愛だというけれど、そんなことはないと言える。

彼が、自分の都合でデートもろくにできないことを申し訳ないと思っていることも、一度として文句を言ったことのない私にわずかな不満をもっていることもしっている。

「あんたホンマええ子やな。あの推理オタクにやるのん、おしいわ」

ああ、彼女に伝えたように、彼にも伝えられたらいいのだけれど。どう言葉にしてよいかわからない。

伝えられたら、彼は後ろを振り返らずに走りだせるのに。

彼が走りだしたその後ろでいつまでだって待っている。

いつでも戻つてくれるよう、待っていると。

いつかちゃんと伝えられたらいいのだけれど。

「ケータイ鳴ってんで」

「ちよつと見すぎた」

彼女に断りをいれてケータイを開くと彼からメールがきている。

sub : ラブラブやん

本文：何イチャついてんねん。

今日ガツコ終わったらどっか行けへんか？

暇やつたらやけど。

やたら真剣な顔をしてケータイをみていたから何事かと思ったら。いつも彼はこんな顔をしてメールをくれるのかと思うと素直にうれしいと感じる。

「なん？デートの誘い？」

「自分といちやつきすぎやて」

「ほつたらかしたにした自分が悪いねや」

階下を覗くと彼と目が合う。

やっぱり隣には幼馴染みの彼女がいて、あんたがメールするなんてめずらしいなあ、とじゃれついている。

妹のような彼女を大事に大事にしている彼。

「行つてもいいかな？」

「しゃーないわ。明日は付き合おうてや？」

「ありがとう」

自分の信念を大事にしている彼。

真っ直ぐ前を向いて、自分の道を切り開いていく彼。

彼の隣に居れることが、嬉しくて。

ほんの少しでも、必要とされることが嬉しくて。

sub : 相思相愛ねん

本文：どこ連れてってくれるん？

今日ナンバに出来たおつきな本屋

の開店日やけど行ってみる？

外書多いんがウリやて。

本当は、少しでもいいから一緒に過ごせる時間があればいいと思ってる。

本当に、彼にはいつも止まらずに前を向いて歩いていてほしいと思う。

その傍に、いることが出来たらいいと願うけれど。

そんなことより彼が、彼らしくいることが一番の願い。

彼の周りには、彼を大切に思う沢山の人がいて、その人たちを彼もまた大切に思っている。

一番傍にるのが、私でなくてもそれが彼らしいことだから。

私もそれでいいと思う。

元気の良い、まるで太陽みたいな彼の傍には、彼に向いて花を咲かせるひまわりみたいになかawaii幼馴染みの彼女がとても似合っていると思う。

けれど太陽だって疲れるときがある。疲れて輝きを失いそうな時だってあるだろう。

そんなとき、彼が私を必要としてくれればいいと思う。

彼の疲れが癒されるよう、何だってやってみせるから。
再び輝けるよう、背中を押せる、そんな存在になりたいと思う。
だから。

私は、彼女、でなくてもいい。

愛人だろうが、お二号さんさんだろうが。

彼が疲れた時に必要としてくれる存在であれば。

私はなんだっていいんだ。

sub : 俺らのことか(笑)

本文: ほな、お好み食べて帰る。

ナンバに美味いところあんねん。

本屋楽しみや〜

二人でゆっくりしよな？

ほら、今日もちゃんと私を見てくれる。
だから、

彼女らしくなくてもいい。

愛人だろうが、お二号さんだろうがかまわない。

寂しいけれど、一番じゃなくてもいい。

彼が、彼らしくいてくれて、

名前を呼んでくれたらいい。

疲れたときに、辛いときに、迷ってるときに、思い出してくれた
らしい。

広く、未知なる世界を開拓する彼の。

彼を束縛する存在になりたくない、から。

傍に
いる
だけ
が、
愛
じ
ゃ
な
い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7570x/>

傍にいるだけが愛じゃない。

2011年10月20日13時07分発行